児童生徒福祉作文集　第43集

みんなが
えがおになる
くらし

令和５年度（2024年２月）

社会福祉法人　鹿嶋市社会福祉協議会

本冊子は、原文のまま掲載しています。

「第四十三集　児童生徒福祉作文集」の発刊にあたって

社会福祉法人　鹿嶋市社会福祉協議会会長　田口伸一

今年度で四十三回目を迎える児童生徒福祉作文事業には、市内の児童生徒の皆さんから合わせて一、一七四編の応募をいただきました。

この事業は、児童生徒の皆さんが家庭や学校・地域社会の生活の中で思いやりの心をもち、ふれあいの輪を広げ、明るい福祉のまちづくりに参加するきっかけとなることを願い実施しております。

今年度は、テーマである「みんなが　えがおになる　くらし」のためにはどのようなことが必要か、家族や友人などの身近な人が抱えている課題を解消するための取り組みなどについて、実体験だけでなく、制度や社会の動向をよく調べた上で、自分なりの考えが述べられている作品が多くみられました。大切な人の笑顔を思い浮かべながら作文を書く様子が浮かんでくるほど、どの作品もしっかりと自分の思いがつづられており、誰もが暮らしやすい社会の実現のためには、思いやりの気持ちがいかに重要であるかを再認識させられました。また、誰かを助ける行動を起こせずに、後悔していることがつづられている作品もありましたが、その作文が勇気を出すきっかけとなり、誰かを笑顔にする行動につながることを願っています。

ここ数年の応募状況を見ていると、何年も続けて応募している児童生徒が多数おり、年齢を重ねることで福祉に対する捉え方や考え方を深めていることが、作品を通して伝わってきます。また惜しくも受賞できなかった作品からも、日常生活の事柄を通じ、福祉とは何か、幸せとは何かについてじっくりと考え、自分なりの言葉でまとめられており、大人である私たちが学ぶことがたくさんあると感じました。こうした児童生徒の作品を読んでいると、将来を担う児童生徒たちの頼もしさを感じるとともに、本事業を継続する意義を感じているところであります。

近年、生活様式の変化や地域のつながりの希薄化などから、地域福祉の課題は複雑化・多様化しております。地域福祉活動計画の基本理念である「関わり合いと支え合いで、安心して暮らせる地域を創る～「支援」から「おたがいさま」へのまちづくり～」の実現に向けて、今後も市民の皆さまや各福祉団体、ボランティア、行政、事業者などと連携を図り推進してまいりたいと思います。また、児童生徒が福祉に触れ、将来にわたり身近なことと捉えるきっかけとなるよう、今後も福祉体験の実施や学生ボランティアの育成に取り組んでまいります。

結びに、この児童生徒福祉作文事業に関しまして、多大なご協力をいただきました関係者の皆さま並びに、福祉作文の審査にあたられました委員の皆さまに心から感謝を申し上げ、発刊のあいさつといたします。

目次

発刊のことば　社会福祉法人　鹿嶋市社会福祉協議会会長　田口伸一

最優秀（小学生の部）

ぼくがみたいえがお　三笠小学校　一年　瀬尾歩叶　1
人をおもう気もち　大同東小学校　二年　立花陸月　1
ひいおばあちゃんのえがおと車いす　高松小学校　三年　土岩彩葉　2
あいさつの意味　高松小学校　四年　雨貝奈柚　3
大切にしたい気持ち　鹿島小学校　五年　横田莉里羽　3
きずなＢＯＸでつながる心　大同西小学校　六年　立原柚奈　4

最優秀（中学生の部）

みんなが笑顔になるために　鹿島中学校　一年　岡田美海　5
みんなが笑顔になるくらし　鹿島高等学校附属中学校　二年　八馬春人　6
母の仕事　大野中学校　三年　眞家日和　7

最優秀（高等学校生の部）

大切な笑顔　鹿島学園高等学校　一年　山本彩加　9
あいさつでつなぐ助け合いの輪　鹿島学園高等学校　二年　飯田実歩　10

【鹿嶋市障がい者福祉計画において「障害者」を「障がい者」と標記することで統一しています。本冊子もそれに準拠するかたちで標記させていただきます。】

優　秀（小学生の部）

おかあさんのみみ	波野小学校	一年	山田聖奈	11
やさしくすること	平井小学校	一年	梅谷心温	11
ぼくとおばあちゃん	鉢形小学校	二年	山本岳	12
こえにだそう	大同東小学校	二年	大川陽翔	13
思いやりってどういうこと	鹿島小学校	三年	刀根紗奈	13
ぼくがもらったやさしさ	高松小学校	三年	雨貝隆生	14
やさしい言葉	平井小学校	四年	土井泉里	14
私の耳	平井小学校	四年	大川遊月	15
二つのまほうの言葉	大同西小学校	四年	沼田愛	16
ありがとうの気持ち	平井小学校	五年	池田健真	17
おじいちゃんの介護	鹿島小学校	六年	横田知希	18
みんながえがおになるくらし	高松小学校	六年	川上一心	19

優　秀（中学生の部）

みんなが笑顔になるには　鹿島中学校　一年　内野翔太　20
耳が聞こえなくても　鹿野中学校　一年　御園瑚白　21
後悔を超えて思うこと　高松中学校　二年　亘希乃華　22
多様性が広がる社会へ　鹿島高等学校附属中学校　二年　安藤亜佑人　23
挨拶の大切さ　鹿野中学校　三年　小林志帆　24
高齢者に対しての接し方　大野中学校　三年　近野なり　25

優　秀（高等学校生の部）

ボランティアから得られるもの　鹿島高等学校　一年　兼平真依　26
障がいは不便であっても不幸ではない　鹿島学園高等学校　一年　久保玲菜　27
音楽の架け橋　鹿島高等学校　二年　中島倖加　28
介護について　鹿島学園高等学校　二年　大塚恵怜奈　29

佳作入選作品　31
児童生徒福祉作文応募数　33
あとがき・児童生徒福祉作文審査委員　34

最優秀（小学生の部）

ぼくがみたいえがお

三笠小学校　一年
瀬尾歩叶

ぼくは、一ねんせいになるときにひっこしをしました。だから、しっているひとがひとりもいませんでした。だれかともだちになってくれないかなとまわりをみても、みんなともだちとたのしそうにしていて、だんだんさみしくなってがっこうがいやになりました。

でもあるひ、かけっこがはやくてかっこいいおとこのこをみつけました。ぼくはどうしてもなかよくなりたくて、おもいきって、

「ともだちになろうよ。」

といってみました。すると、

「いいよ。」

といってくれて、うれしくていいきもちになりました。すごくドキドキしましたが、ゆうきをだしてよかったんだ、とおもいました。

がっこうには、ぼくみたいにがっこうにいくのがいやになったり、けがやけんかをしてないたりするこがいます。そういうとき、ぼくはいつも、「げんきにしてあげられないかなあ。」とおもいます。ともだちがいるとたのしくなってきて、すこしがんばれるんだとわかってくれたら、きっとぼくみたいにがっこうにいくのもいやじゃなくなるし、げんきがでるとおもうからです。

ぼくがしてもらってうれしかったのは、おはなししてくれたことや、「いいよ。」とともだちになってくれたことです。ひとりじゃなくなって、ぼくはさみしくなくなったので、こまっているひとがいたら、「だいじょうぶ？」とはなしかけたり、おはなしをしてげんきになってもらいたいです。

みんながともだちのきもちをかんがえたり、たいせつにしてあげれば、きっとがっこうにいくのもたのしくなってニコニコがふえるとおもいます。だから、ぼくはこれからも、みんなにやさしくしたいし、みんなとなかよくなりたいです。

人をおもう気もち

大同東小学校　二年
立花陸月

はじめに、人をおもう気もちとはどういうことなのか、自分の中で考えたり、お父さんお母さんにきいたりとし、みつけてみようと思った。

少し前まではコロナなどで人とのかかわり、ふれあう時間がへっていたと思うが、今年はそれが変わり、少しとおくへでかけたり、たくさんの人とかかわるようになってきた。

その中で、かかわりがふえるようになった分、自分のことだけではなくて、ほかの人の分までかんがえてせいかつをしないといけないと思った。そこで大切なのが人をおもう気持ち。「おもいやり」なんだと思う。

みんながこれからまたいっしょに、なかよくすごせるように、あいての気もちになってかんがえて、これをしてほしいのかな。こうしたらよろこんでくれるかな。いまこまっているのかな。など、気もちをかんが

えながらせいかつをすると、さらに良いくらしになるような気がした。
あいての気もちをかんがえることは、とてもむずかしいこと。かんたんにできることではない。だけど、そのような気もちでいたら、そのようなきもちをもってせいかつをしていたら、ひとりひとりがきっとかがやいていく。ひとりひとりがえがおにあふれたくらしになる。そして、せかいじゅうみんながあたたかなえがおになり、はっぴーになるように思えた。
だからぼくは、ぼくからはじめられることをはじめてみようと思った。ひとをおもう気もちをもち、おともだち、かぞく、かかわる人みんなとつながれるように。それがいつかみんなにひろがり、すてきなくらしになるよう、ぼくなりのはじめのいっぽとして、やってみようと思います。

ひいおばあちゃんのえがおと車いす

高松小学校　三年
土岩彩葉

わたしのひいおばあちゃんは、今年九十さいになりました。ひさしぶりに会ったひいおばあちゃんは、足が弱っていて歩くのがむずかしくなっていました。家の中では、おばあちゃんの力をかりて歩いていて、お出かけする時は、車いすを使っていました。
この前いっしょにお出かけした時に、車いすをおさせてもらいました。そしたら、ひいおばあちゃんがとびっきりのえがおで、
「ありがとう。」
と、言ってくれました。わたしは、とてもうれしくて、
「こちらこそありがとう！」
と、えがおで、返しました。
お店の中を歩いていると、今までは気がつかなかったけれど、体がふ自由な人が使いやすいようにくふうしているのを教えてくれるマークがちゅう車場やトイレなどたくさんの場所にあっておどろきました。車いすだと、だんさのある道に行けないのでスロープを使いました。エレベーターでは、車いすマークのボタンをおすと、とびらがいつもより長く開いたり、ゆっくりしまったりしました。車いすで何ども利用して、どれも体がふ自由な人にとってふだんの生活にひつようなものだと感じました。
ひいおばあちゃんは、その日一回もこまることなく、ずっとえがおですごしていました。わたしはひいおばあちゃんのえがおが大すきなので、またいっしょに出かける時はこのマークがある場所をさがしておこうと思いました。
そして、まだあまり知らない人にも、とてもひつようなものだと知ってほしいと思いました。たくさんの人に伝えて、一人でも多くの人に、えがおになってもらいたいです。

あいさつの意味

高松小学校　四年
雨貝奈柚

わたしは小さいころから人見知りで、あいさつをしてもらってもかえせない。しないのはむししたのと同じだし、相手もいやなきもちになるなあと思っておじぎはするけど、「ちゃんと返したいな」と思う。だからいつも「今日こそ返事を返したい」と思うけど、あいさつをしてもらうとなんだかてれくさくてできなくなってしまう。だからわたしは、友達に大きな声で「おはよう」と言ったり、先生にも元気な声であいさつをして、家で「いただきます」や「おやすみなさい」も元気にハキハキと言うようにした。みんなから返事をもらえると、今日も一日がんばろうと思えることに気付いた。何日か後、またあいさつをしてもらった。わたしは勇気を出して元気よくあいさつできた。うれしかったけど、土日に入って次の日、わたしはまた小さな声で返事をしてしまった。相手がぽかんとしていたから、あわてておじぎをした。ごにょごにょしていてあいさつをされるのがいやだったかなと思われていないか不安になった。次からは元気よく大きな声で返事をしようと思った。さらに、もっと笑顔であいさつをできたらいいなと思った。そして知らない人に自分からあいさつをしてみるのはこわかったしむずかしかった。友達や家族なら、うまくできなくてもわらってくれそうなのであまりきんちょうしないけど、初めて会う人はドキドキして不安になってしまって、うまくできなかったらどうしようと考えすぎてしまいどんどんこわくなって言えなくなってしまう。でも、友達と遊びに行った時、犬のさんぽをしている人とすれちがってかわいいなと思い見ていたらふと言葉に出てしまっていた。いっしゅん「あ！」と思ったけどかい主さんは「ありがとう」と笑って答えてくれた。その時わたしは深く考えずにしぜんと言えばいいのかなと思った。次の日、自分からあいさつをすることができた。その人も、笑顔で返してくれた。わたしはそれがパワーになってその後もたくさんあいさつをしたり、返したりした。自分からあいさつをした時、その人に返してもらうととても心がポカポカした。そして、家の中でのあいさつもだんだんざつになってしまっていたので、少しずつなおすように気をつけた。わたしはちゃんとあいさつを返せないままだったら、ざいあく感がたまるばかりで自分もつらかったと思う。でもあいさつをできるようになろうと努力をしたから、毎日気持ち良い一日をすごせるし、相手も良い気分になってもらえると思う。

わたしは、あいさつをすることは人にとってとても大切なことで、みんなを笑顔にする方法の一つだと思う。

これからも元気よくたくさんの人にあいさつをして、自分もまわりの人もみんなを笑顔にしていきたいと思った。

大切にしたい気持ち

鹿島小学校　五年
横田莉里羽

「座りなよ。」

「えっ、優先席だよ。」

先日、電車でこんなやり取りをした。結果的に私は、ゆずる相手も近くにいなかったので、座ることにした。しかし、なんだかソワソワした気

持ちになったのをよく覚えている。

その後、あるニュースが話題になっていた。ある国の大使の方が、空いている電車内で優先席に座り、批判され、反論したという内容だ。このニュースを目にしたとき、「あっ、やっぱりだめだったんだ」という思いが一番に私の中にうかんできた。モヤモヤする私に母は、こんな話しをしてくれた。

「よいか、悪いかと言えば、『優先』であって、『専用』ではないから、いけないことではないよ。それよりも、優先席を作らないとゆずることができない、『人として当たり前』が、当たり前にならないこと、『特別な人』と判断したときだけ席をゆずるという感覚をもった人が多くいることが問題なのかもね。」

この話しを聞き、はっとする自分がいた。私は、優先席に座った。そのときのソワソワの正体が分かったような気がしたからだ。それは、生活の中で意識せず、優先席に座る人は、「特別な人」「特別でない」私は、座るべきでないと勝手に、無意識のうちに区別していたのだと思う。困っている人に席をゆずるのは、当然のことだ。母も私がお腹にいたとき席をゆずってもらい助かったと話していた。

この出来事から、区別について時々考えることがあった。その中で、区別はときに相手を悲しい気持ちにさせることがあると感じることがあった。私には、弟がいる。弟は、黄色が好きだ。黄色は、元気が出る色とよく話している。そんな弟が、友達に折り紙をもらったとき、

「男の子は、はい青ね。女の子は赤。」

と言いもらっていた。弟は、自分を思い折ってくれたものなのに、なんだかうれしそうではなかった。今思えば、「男女の区別」が悲しませたのかもと思う。

私も学校生活の中で、何気なく男女で区別してしまっていたように思う。男女で助け合うことは「人として当然のこと」だと先生や両親もよく話してくれるし、私もそう思う。しかし、「男子だから力持ち」「女子だから静か」は、区別であり、偏見だと今は、強く思う。

今世界を見ると、国籍の区別や、人種、肌の色の区別で悲しい戦争や事件が起きている。戦争も元は、心の中の区別の気持ちからはじまったのではと思う。世界から見たら小さい一人の私だけれど、私は、「区別」をなくしていきたいと思う。そしていつの日か、意識してなくすのではなく、「人として当然のこと」が当たり前にできる私でありたいし、社会になってほしい。そして、すべての人が、当り前に笑顔でいられる社会がすぐそこにあると信じ、できることからしていきたい。

きずなＢＯＸでつながる心

大同西小学校　六年
立原（たちはら）　柚奈（ゆずな）

私は、お母さんと大野ふれあいセンターに行った時に入口にきずなＢＯＸと書かれた大きな箱を見つけました。私は何なのかが気になり、お母さんに、

「この大きな箱って何？」

と聞きました。お母さんは、

「きずなＢＯＸっていうのは、食べ物に困っている人達のために食べ物を寄付できるＢＯＸだよ」

と言っていました。私は、この活動が素晴らしいと思い、詳しく調べてみました。きずなＢＯＸは、ＮＰＯ法人フードバンク茨城と鹿嶋市社会

福祉協議会が連けいして食べ物に困っている人達を助けるために設置していることが分かりました。そして、きずなＢＯＸは鹿嶋市に全部で三か所設置されているそうです。きずなＢＯＸにはお米やインスタント食品、レトルト食品などが寄付されていることが分かりました。

私は夏休みに社会福祉協議会で、きずなＢＯＸに寄付された食べ物に賞味期限を書くボランティアをしました。私は、正直こんなにたくさん寄付されているとは思わなかったのでおどろきました。三百個以上あるカップ麺に一つずつ賞味期限を書きました。量が多くて数も数えながらだったので二時間以上作業していました。手がつかれたけれど、終わった時は達成感があふれ出して、がん張ってよかったなと思いました。そして、「手伝ってくれてありがとう」と言われ、自然と笑顔になりました。私は、きずなＢＯＸに食べ物を寄付してくれている人も、感謝されたり、喜んでもらえたりしているのを見ると、自分も嬉しくなるから、寄付してくれているのかなと思いました。きずなＢＯＸは寄付する人もボランティアだし、寄付された食料を管理するのもボランティアです。一人一人ができることが小さなことでも、小さな助け合いが集まれば、とても大きな取り組みになると思います。場所によっては、ファミリーマートでも取り組んでいて、実し店ぽは二千四百三十四店ぽになり、集まった食品は二年間で九二・二トンにもなります。人が活用しやすい場所の方が寄付される食料も多いことが分かりました。なので、もっと多くの人に知ってもらいたいなと思いました。そのためには、もっと多くの場所できずなＢＯＸを設置したり、ポスターをけい示すれば、みんながこの活動に取り組んでくれると思います。

きずなＢＯＸを通して、人を助けるのは素晴らしいことだと改めて感じました。みんながみんな助け合い、笑顔で生活できる世の中を作るためには、今の自分ができることを考え、実行することが大切だと思います。そうすることで、知らない人ともつながり、新たな取り組みが生まれることもあるかもしれません。みんながつながって、食事から笑顔な社会を創る世の中になることを私は願います。

最　優　秀（中学生の部）

みんなが笑顔になるために

鹿島中学校　一年
岡田（おかだ）美海（みみ）

私には、認知症のおじいちゃん、難聴のおばあちゃんがいます。私の親は、朝から夜まで仕事をしているので、常に自分の家の隣のおばあちゃんとおじいちゃんの家に行っています。

おじいちゃんは言葉が思い出せず、あまり話が理解できないことがあるし、たまにみんなとは違う行動をしてしまいます。そんなおじいちゃんをおばあちゃんが介護をしています。

おばあちゃんは、補聴器をつけているのですが、あまり音が聞こえず、大変なことが沢山あると思います。例えば、車の音が聞こえず車に気づくことができなかったり、みんなの会話に入れなかったりします。私は、そんなおばあちゃんにイライラしたことが何度もありました。おばあちゃんは聞こえない時、何度も同じことを聞き返さなければいけないので、自分は答えているのに、何度も聞いてきたからです。ですが、

おばあちゃんの話を聞いて、もう一度しっかり考えさせられました。

おばあちゃんは私が小さい頃から、みんなに親切にしてあげなさいとたくさんの話をしてくれました。特に、おばあちゃんのように、耳が不自由な人には正面を向いて、ゆっくりと話してあげないといけないし、目の不自由な人には優しく声をかけて手を引いてあげたりしないといけないと言われました。そして、誰に対しても思いやりの気持ちを持って接することが大事だと言われました。しかし、その時の私は、少し適当に他のことをしながら答えていたんだと思います。それでは、おばあちゃんにしっかりと聞こえるはずがないので、もう少しおばあちゃんの気持ちを考えてあげないといけなかったと思いました。

おじいちゃんは、三年ほど前、物の名前が言えず、病院で失語症と診断され、リハビリをしていました。ちょっとしたことでいきなり大きな声で怒鳴ったり、着たものを洗濯しないでそのまま着てしまったりと少しずつできないことが増えていき、とても大変だったし、おじいちゃんも今までできたことがなんでできないのかと苦しんでいました。私は、そんなおじいちゃんが可哀想だったし、自分も悲しかったです。でも、そんなおじいちゃんを見て、前のように明るく、みんなを笑わせてくれる面白いおじいちゃんに戻って欲しいと思いました。そして、少しでも役に立てればと思い、家族みんなで話をして、おじいちゃんのことを全員でサポートすることにしました。私と妹で、おじいちゃんの頭や体を洗ったり、お兄ちゃんがいつも飲もうとしない薬を飲ませたり、お母さんは仕事のない日に病院の予約を取って、連れて行ったりして、みんなで協力しました。そして、いつもおじいちゃんと一緒にいるおばあちゃんの負担も減り、おばあちゃんがいつもよりも安心して明るく暮らせるようになりました。

今は、おばあちゃんには、正面を向いて、口を大きく開けてゆっくりと話をするように気をつけています。そして、おじいちゃんには、認知症という病気だということを私達が受け入れて、変なことや間違っていることをしていても笑って過ごすようにしています。

耳の悪い人には正面に顔を向けて大きな声でゆっくりと話してあげる。認知症の人には認知症だとしても、これはだめ、あれはだめ、と否定するのではなく、みんなと同じように接して無理なときには、少し手伝ってあげる。みんなが笑顔になるためには、みんながそれぞれに寄りそい、理解をしてあげることが一番大切なんだと思います。今、おじいちゃんやおばあちゃんのような人はたくさんいると思います。そういう人がいたとき、みんながその人に自然に優しく接することができる世の中になればいいと思います。

みんなが笑顔になるくらし

鹿島高等学校附属中学校　二年
八馬（はちうま）　春人（はると）

私の伯母はいわゆる「お節介」だ。今は離れた所に住んでいるが、年に何度か祖父の様子を見るために帰省する。そうなると私はたちまち忙しくなる。学校や部活の事、友達の事、勉強の事や予定などをあれこれ聞かれるはめになるからだ。そして、毎日の行動や振る舞いにまで口を出してくる。まるで母が二人になったようで疲れも倍になる。

私の祖父は近所で一人暮らしをしている。高齢ではあるが、連日猛暑だと報道されているのにも関わらず、草刈りや庭の手入れをしたり、釣りに行ったり、時には車で遠出もするほど元気だ。そんな祖父の身体を

心配して、母や伯母はあれこれ口うるさく言うので、祖父とはよく言い合いになる。祖父は、

「大丈夫だ。まだまだお前達より元気だ。」

と逃げるように返事をして、また一作業するのがいつもの流れだ。母達の気持ちと祖父の気持ちがかみ合っていない状況を見て、もどかしい気持ちになり祖父に尋ねた時がある。伯母のお節介をどう感じているのか気になったのもある。あまりにも心配されるとわずらわしく感じる時もあるようだが、それは自分を気遣っての事だから悪い気はしないのだそうだ。家族だから心配するのは当然の事だと思うが、伯母のお節介は家族に限ったものではないようだ。突然雨が降ってきた時には、近所の留守の家の洗濯物をテラスに片付けたり、高齢のご夫婦が運動のために散歩をしていれば家まで車で送ったりもしたそうだ。また、駅で定期をなくし所持金もなく困っている学生を見かけて、電車代を渡したそうだ。どこの誰かも分からない人に、である。ここまでくるとお節介を通り越して、ありがた迷惑のような気もする。なぜそのような事をしたのか聞くと、この困っている学生が私だったら、と考えたからだそうだ。もしも私が同じような場面に出くわした時、誰かが自分の代わりに手を差しのべてくれたらそれでいいと笑って話してくれた。私はその話を聞いて、気持ちが温かくなったし、伯母が人に好かれる理由が分かった気がした。実際、伯母はこの地域を離れて長いが、何年かぶりに会う人達とも他愛もない会話をしたり、気遣ったり、逆に心配されたりしている。思えば、近所の人達も伯母に近いものがある。祖父が旅行で家の明かりがつかない時は母に連絡がくるし、見かけない人が家の敷地に入れば状況を報告してくれる。祖父の友人はしばしばおかずを作って様子を見に来てくれる。このような人間関係の親密さを面倒に感じる人もいると思うが、少なくとも私の周りにはそう思う人はいないように思う。逆に困った時には自分も同じように力になろうとしている。

立場が違えば、考え方や、物の捉え方も変わってくるものだと思う。もしかしたら騙されたり、他人から見れば押し付けがましく思われてしまったりする時もあるかもしれない。自分が良かれと思ってしたことでも、度を越してしまえば、相手のストレスや負担になり、それは余計なお世話になってしまう。大切なのは自分や相手、周囲の人々が気持ちよく過ごせるかどうかだと思う。地域・国・世界、そんな広い範囲で人々を笑顔にするなど、経験や知識不足の私には想像すらできない。ただ、ごく身近な所でできる少しの思いやりや優しいお節介で助けられる人も少なからずいると思う。また、私は人の目を気にして見て見ぬふりをしてしまう時がある。でも、勇気を出して少し踏み込んでみる事で、相手の気持ちに寄り添ったり、人と人の絆を深めたりして、お互いの支え合いに繋がるのではないか。それが地域のコミュニティの力になり快適な暮らしを実現する事となって、みんなの笑顔に繋がっていくのではないか。私はそう信じて、自分ができる事から少しずつ行動していきたい。まずは、伯母のお節介を笑って聞き流す事から始めようと思う。

母の仕事

大野中学校　三年
眞家日和（まいえひより）

「福祉」という言葉を聞いて一番に思いついたのは「介護」でした。理由は、私の母が訪問介護というお仕事をしているからです。お年寄りの入浴をお手伝いしたり、トイレ誘導やオムツ交換などが訪問介護の仕

事内容です。母はいつも仕事から帰ると、「つかれた」や「肩が痛い」とよく言います。母の負担を少しでも減らせるように私も家のお手伝いや肩もみなどをします。元気な母が仕事から帰ると、とても疲れているように感じました。そこで、母の仕事について気になったので聞いてみることにしました。

まず、母は訪問した時に顔をみて安心してくれるところにやりがいを感じると言っていました。母が訪問するお宅では一人暮らしのお年寄りが多いです。一人暮らしだと、話し相手がいなかったり、人との関わりが少ないので、孤独だったり寂しいと感じるお年寄りが多いようです。そんな中、訪問介護という形でも人と話せることがうれしいと感じるお年寄りも多いみたいです。私がもし、お年寄りの立場でも、とてもうれしいと思います。一人の時間も大切ですが、人と一緒にいる時間も同じくらい大切なんだなと思いました。

つぎに、オムツ替えや入浴介護をして快適に過ごしてもらえる手助けができた時にもやりがいを感じられると言っていました。訪問介護は利用者さんと一対一で介護サービスを行うため、利用者さんの反応をダイレクトに感じられます。そのため、悪いこともありますが、「いつもありがとう」「来てくれて助かったよ」などの言葉を聞けるのが何よりうれしく、「人の役に立てた」「必要としてくれている」という自信がわいてきます。また、利用者さんは自分たちではできないことを抱えて困っていることばかりです。困っていた経験があるからこそ、「ありがとう」など感謝の言葉に実感がこもっています。心からの感謝の気持ちは本当にうれしいんだろうなと思いました。ですが、いいことだけじゃないのが訪問介護で、いやなところもあります。

例えば、利用者さんに介護を拒否されてしまったり、利用者さんやその家族と相性が悪かったりすると関係がぎくしゃくしてしまい利用者さんのところへは行きたくないなど、仕事が楽しくなくなってしまう方もなかには沢山いるみたいです。また現場で業務外の仕事を頼まれてしまい、どうしたらいいかわからないなどのなやみも多いことが分かりました。本当にやりがいのあって楽しい仕事だけど、いやなこともあるんだなと実感しました。ですが、いやなことを乗り越えてこそ訪問介護という仕事にやりがいを感じられるのではないかと考えることもできました。

母の仕事についてたくさんのことを学び、「介護」は私が思っていたよりずっとやりがいのある大変だけどすばらしい職業だということが分かりました。また、このような仕事をこなす母を尊敬します。利用者さんのように一生けん命頑張る人たちを支える母の仕事は、本当に大変だけどやりがいのある仕事で介護ってすばらしいと感じました。利用者さんの体だけでなく、心にも寄りそうことが介護なのだと思いました。将来、どのような仕事につけるかまだまだ分かりません。ですが母の仕事のようにやりがいを感じることができ、人と人とで支えあえるような、そんなすばらしい仕事をしたいと思いました。

最優秀（高等学校生の部）

大切な笑顔

鹿島学園高等学校　一年
山本彩加（やまもとあやか）

まず、笑顔について今からお話ししたいと思います。

私が小学校五年生の時、祖父の膵臓にがんが見つかりました。その時は、「まだ大丈夫だろう」、「流石にまだまだ生きててくれるだろう」と思っていました。しかし、状態が急に悪化して、思うように動けなくなったり、寝たきりになったりしていました。そして、日がたっていくと、祖父の髪の毛は抗がん剤治療で沢山抜けてしまったり、祖父は沢山の薬を飲んでいたりしました。そんな祖父を見て、とても辛くて、とても悲しいんだなと思っていました。ですが、そんな時でも祖父はいつもと変わりなく笑顔で接してくれて、お話ししながら、笑い合ってくれました。私はその時、「無理して笑わなくていいのに」と思っていたから、逆に私が自然と笑えなくなってしまっていました。祖父が亡くなった後、どうしてあんなに祖父は笑顔でいてくれていたのだろうと考えました。本当の答えは、亡くなってしまった祖父にしか分からないから、私はもう知ることはできませんが、祖父は「自分が笑顔でいないと、みんな笑顔でいられない」などと考えていたのかなと私は思います。実際、私は祖父が亡くなるまでの残り少ない時間を、祖父のおかげで笑顔で過ごすことが出来ました。祖父が亡くなったときは、今までにないくらい辛くて、沢山泣いて、次の日もなかなか立ち直れなかったけど、祖父が辛くても笑顔でいてくれていたから、私は今、後悔なく笑顔で過ごすことが出来ています。もし、祖父が笑顔でいなかったら、きっと沢山後悔をしていたと思います。今も元気よく笑顔で過ごせているのは、祖父の笑顔のおかげです。私は祖父が亡くなる前に小学生の頃の夢だけど、「プロサッカー選手になりたい。」と祖父に将来の夢を伝えました。祖父はその頃、喋ることも難しいくらいとても辛かったはずなのに「頑張れよ」とその時も笑顔で言ってくれました。私は、まだまだサッカーが下手くそだし、全然プロとかのレベルに達していなくて、サッカーをやめたいと思うことは何度もあるけど、祖父の笑顔を思い出すと、頑張らなきゃと思うことが出来ます。だから、今自分に出来る限りのことを全力でやって、祖父との約束を必ず守れるようにしたいと思っています。もし、自分がプロになったとしても、プロになれなかったとしても、そこで満足せず、もっともっと上手くなれるように常に上を目指して頑張りたいと思います。このような気持ちになれたのも祖父の笑顔のおかげです。辛くなった時には祖父のことを思い出して、頑張ります。

このように、誰かが笑顔になると周りの人も笑顔になったり、誰かの心の支えになったりします。みんなが笑顔で過ごすためには、相手を思いやる気持ちや、笑いたいときには思いっきり笑うことが大切だと思います。矛盾しているかもしれないけど、泣きたいときに泣くのもとても大切なことです。みんなが自分の気持ちを第一に笑顔でいられるといいなと思います。この世の中は、戦争や殺人などで今は嫌な空気になっているけど、このちょっとした笑顔で少しずつでも嫌な空気を幸せな空気に変えれるようにしたいです。一人一人の笑顔で世界は変えれます。嫌なことばかりを考えず、笑顔で前向きに過ごしていこうと思います。家

族や友達、大切な人の笑顔は祖父の変わりに今度は私が守っていきたいと思います。

あいさつでつなぐ助け合いの輪

鹿島学園高等学校　二年
飯田実歩

現代の日本社会では高齢化が著しいスピードで進んでおり、二〇二三年現在六十五歳以上の高齢化率は二十九パーセントとなっている。特に私が住んでいる地域では、子どもの数が極端に減り、周りに高齢者が増えていることをひしひしと感じている。

そんな社会で嘆かれているのは社会保障制度や財政の問題、経済成長の低迷などだ。だが私がそれよりも問題だと考えるのは「高齢者の孤立化」である。高齢者が孤立してしまうと孤独死のリスクが高まったり、安全に暮らすのが難しくなったりしてしまうのだ。

私の祖母は、私が住んでいる茨城から遠く離れた新潟に一人で住んでいる。夏と冬の長期休みの時はバスと新幹線を使って遊びに行ったり、ビデオ通話で顔を見ながら話をしたりしているが、その時以外は一人で生活しているため、もし何かあったらと思うと、とても心配になる。しかし春休み、祖母の家に遊びに行ったとき、少し不安が解消される出来事があったのだ。

朝食をとった後、祖母に近くの川まで散歩しようと誘われた。川は家の近くにあるため、長くても三十分くらいで終わるだろうと思い、準備をして一緒に外に出た。すると祖母は突然川と真逆の方に歩き出した。「川はあっちじゃないの。」私が言うと祖母は、「〇〇さんのお家に行くんだ。」と言った。何か届けるものでもあるのかなと思ったが、知り合いの家に着いた祖母はただの世間話を始めたのだ。畑のネットの張り方やおすすめの電化製品、お互いの近況報告を話し終えると、じゃあまたねと言ってまた歩き、違う人の家に行き世間話をしてまた次の家へというのを三、四回繰り返した。聞くと祖母は日頃からこのようなことを行っているようなのだ。なんでわざわざ会いに行くの？スマホがあるじゃない。そう言うと祖母はこう教えてくれたのだ。

「ばあちゃんは一人暮らしでしょう？確かに寂しいからっていうのもあるけど、日頃から会いに行っていれば、もし私に何かあったとき誰かが気づいてくれるかなって思って。」

私はとても素敵なことだと思った。地域のつながりの希薄化が進んでいる今、こうやって近所の人とお互いに支え合えるような、助け合えるような習慣が今でもあるお陰で、祖母は安心して活き活きと暮らせているのだ。私の地域でも下校中や近所のコンビニまで歩いている時に、よくお年寄りの方に話しかけられる。実はそんな近所付き合いに少し苦手意識をもっていた。顔も名前も知らない人に話しかけられるのは少し怖いと思うこともあった。だがきっとお年寄りの方はこの地域に住んでいる私のことを気にかけてくれているのだと思うと、すごくありがたいことだし、嬉しいことなのだと思えるようになった。

高齢化が進む中で、私が問題だと考えていた「高齢者の孤立化」は人や地域とのつながりによって解決できるのではないかと考えた。人と人とのつながり、地域とのつながりを大切にすることで得られる効果は高齢化問題だけではない。子どもを狙った犯罪や事故を防いだり、災害時に助け合えたりできると思う。都心部に住んでいるとなかなか地域とのつながりを強めることは難しいと思うし、どんな人でもいきなり人との

つながりを深めることはできないと思う。だからまずはあいさつをしっかりとすることから始めることをすすめたい。あいさつをされて嫌な気持ちになる人はおそらくいないだろう。あいさつが人と人とをつなぐかけ橋となることを信じて生活していきたいと思う。

優　秀（小学生の部）

おかあさんのみみ

波野小学校　一年
山田聖奈

わたしのおかあさんは、はるにびょうきになって、みぎのみみがほとんどきこえなくなりました。びょうきになったせいで、いちにちじゅうザーというおとがきこえたり、つかれやすく、あたまがくらくらして、めがまわることがありたいへんそうです。

わたしがはなしかけても、きこえていなかったり、ききまちがいが、おおいです。そういうときは、おおきなこえでゆっくりはなしたり、ひだりがわにいってはなすようにしていますが、なんどもつたえるのはたいへんです。

おかいものにいったときは、レジでてんいんさんのこえがきこえなくて、ききかえしていることがおおいです。きこえなくてむししたとかんちがいされるのはいやだし、なんどもききかえしてわるいなぁともおもうそうです。おかあさんがきこえていないとき、これからは、わたしがつたえてあげようとおもいます。

おかあさんは、ヘルプマークをもっています。これは、たすけてほしいときにひつようなものです。こまったときにしらせてほしいおとうさんのでんわばんごうや、びょういん、どんなたすけがひつようかがかいてあります。わたしは、ヘルプマークをつけて、こまっているひとがいたら、たすけてあげたいです。みんなでたすけあえると、すてきなせかいになるとおもいます。

やさしくすること

平井小学校　一年
梅谷心温

わたしは、ひとのきもちをかんがえてこうどうすることが、やさしさにつながるとおもいます。なぜなら、あいてのきもちをかんがえることで、あいてがうれしくなったり、えがおになったりするからです。

やさしくすると、みんながわらってすごすことができるとおもいます。ぎゃくに、いやなことをされると、かなしくなるし、わらえなくなってしまいます。だから、わたしは、じぶんがされていやなことは、ほかのひとにしないときめています。

がっこうでいじめをなくそうしゅうかいをしました。わたしのクラスできめたノックアウトせんげんは、「じぶんがされていやなことは、ともだちにしない。やさしい一ねん一くみ。」とはなしあいました。みんなではなしあったこのせんげんも、ひとのきもちをかんがえてこうどうすることがやさしさになることに、かんけいしているとおもいます。クラスのみんなが、わらってたのしくいられるように、みんなでがんばっ

ています。

わたしはしょうがっこうにゅうがくしてたくさんのおともだちができました。だからがっこうがすごくたのしいです。ともだちもだいすきです。ときどきけんかしてしまうこともあるけど、そのとき「ともだちはどうかんがえたかなぁ。」「けんかをしなければよかったなぁ。」とおもい、「ごめんね。」といわなければいけないとおもいます。あいてのきもちをかんがえることで、あやまるというやさしいこうどうもできるのだとおもいます。

わたしがころんだときに、ともだちはしんぱいして、ほけんしつにつれていってくれました。きっと、ともだちはわたしのことをかんがえてやさしくしてくれたのだとおもいます。わたしはすごくうれしかったし、わたしも、こまっているひとをたすけてあげたいとおもいました。

だから、わたしはひとのきもちをかんがえてこうどうできるひとになりたいです。

ぼくとおばあちゃん

鉢形小学校　二年
山本（やまもと）　岳（がく）

ぼくは、夏休みにおばあちゃんと、とちぎけんにりょこうに行きました。

りょかんのエレベーターには、右はじにすわるところがありました。

ぼくは、

「すぐつくのに、なんでこんなところにすわるところがあるのかな。」

と、ふしぎに思って、おばあちゃんに聞いてみました。

すると、おばあちゃんは、

「すぐにつくけど、みじかい間でも立っているのがたいへんな人もいるんだよ。」

と、教えてくれました。

そのとき、ぼくは思い出しました。前におばあちゃんといっしょにあるいたときに、おばあちゃんが、

「がくくんについていくのはたいへんね。」

と、わらって言っていたことを。

ぼくは、あることに気がつきました。

ぼくはいつも元気いっぱいで、体をうごかすことが大すきです。たくさんあるけるし、はやくはしることもできます。つかれても、すこし休めばすぐに元気になります。でも、おばあちゃんはぼくよりも、歩くのも、車をおりたりするのも、なにをするのもゆっくりなのです。

ぼくは、このりょこうで、ぼくにとってはかんたんでも、おばあちゃんにとってはむずかしいこともあるのだと知りました。

ぼくはこれから、おばあちゃんといっしょにすごすときには、ぼくだけが楽しむのではなく、おばあちゃんもいっしょに楽しめるようにしていきたいです。

あるくはやさをあわせたり、つかれたらすわるところをよういしてあげたり、おばあちゃんのためにできることをさがして、元気な人もゆっくりな人も、みんなが楽しめたらとてもすてきだと思います。

こえにだそう

大同東小学校　二年
大川陽翔

ぼくは、今までかぞくや友だちにうれしいことをたくさんしてもらったことがあります。おとうさんやおかあさんに「ありがとう」は、しっかり言いなさいと言われてきました。それでもぼくは、はずかしい気もちもあり、すぐに言えませんでした。小学生になったとき、かぞくにうれしいことをしてもらったので、

「ありがとう。」

とこえにだしてつたえました。すると、おとうさんやおかあさんが、

「どういたしまして。」

とえがおでこたえてくれました。その時ぼくは、こころがあたたかくなりすごくうれしかったです。なんで言えなかったんだろうとおもいました。

「ありがとう」を言うと、ぼくもまわりの人たちも気もちがよくえがおがふえるので今では、たくさん「ありがとう」を言えるようになりました。

もう一つ、こまっている人がいたら、ぼくは、「どうしましたか、だいじょうぶですか。」と、こえをかけたいです。こえにだすことは、とてもゆう気がいることだけど、ぼくの一こえでだれかをすくえたらいいなと思いました。今は、かぞくや友だちがこまっている時にこえをかけられるけど、大きくなったらたくさんの人にこえをかけられるようになりたいなとおもいました。みんなが、ゆう気をだしてこえにだすことができたらあたたかくてへいわなせかいになると思いました。まずはゆう気をだしてこえにだそう。そして、あかるいせかいをつくろう。

思いやりってどういうこと

鹿島小学校　三年
刀根紗奈

「思いやり」とは、こまっている人のなやみをそばで聞いてあげること、まわりでこまっている人がいたら助けて楽にさせてあげること、さべつをしないこと、だれにでもやさしくせっすることだと思います。

わたしがこの前買い物に行ったとき、買い物カートをおしていたおじいさんが、だんさにつまずいて、カートを動かせなくなっているのを見かけました。わたしはどうしようかまよったけれど、

「だいじょうぶですか。」

と声をかけました。そして、いっしょにカートを引っぱり、動かしてあげました。すると、

「ありがとう。」

と言ってもらうことができました。いっしゅんどうすればよいかまよったけれど、おじいさんの手助けができてよかったなと思います。

また、わたしが買い物中に歩いていると、わたしの後ろに、小さな男の子がついてきているのに気づきました。このときも、声をかけようかまよいました。けれども、ゆうきを出して、

「どうしたの、まいごになっちゃったの。」

と聞くと、男の子はうなずきました。それは大変だと思い、男の子が不安にならないように手をつないで、お母さんをさがすことにしました。するとすぐにお母さんが見つかり、男の子はうれしそうにしていました。わたしは、お母さんが見つかってよかった、声をかけてよかったと

思いました。自分がまいごになったわけではないけれど、助けたわたしもすごくうれしい気持ちになりました。

知らない人に声をかけることは、とてもきんちょうするし、どうするかまよってしまいます。けれど、この二つのけいけんを通して、ゆうきを出して声をかけることが大切だと気がつきました。これこそが、わたしができる「思いやり」だなと思いました。これからも「思いやり」をもって、みんながえがおになってもらえるように行動していきたいです。

ぼくがもらったやさしさ

高松小学校　三年
雨貝隆生

ぼくは二年生のときに一週間入院をしました。入院と言われた時、初めての事でびっくりして頭がまっ白になりました。そんな時、かんごしさんが「よろしくね。」と笑顔で言ってくれて少しホッとしました。

ぼくは、へやの外に出れなかったし、コロナで面会もできなかったので家族にも会えず、だんだんさみしくなりました。

でもぼくががんばれたのは、みんなからのやさしさのおかげです。

かんごしさんは一日に何回もへやに来ます。みんなニコニコと「隆生くん！体調はどう？」と来てくれて、点てきをかえるときも「がんばろうね！」と言ってくれて、ぼくは元気がでました。他にも、「これむずかしいけど楽しいよ！」とパズルやクイズの本を持ってきてくれたり、とてもうれしかったです。ごはんを持ってきてくれる人やそうじにきてくれる人も、みんなが笑顔であいさつをしてくれて、がんばるパワーになりました。毎日しんさつに来る先生たちも、ぼくの大好きなゲームの話をしてくれたり、話をたくさん聞いてくれてぼくも笑顔になれました。

ぼくのうでには点てきがつながっていてうまく動けなかったので、お母さんがトイレに一緒に来てくれたり、毎日体をふいてくれたり、お父さんとお姉ちゃんがにもつをびょういんまで持ってきてくれたり、家族のみんなも助けてくれました。

不安でいっぱいだったぼくは一人じゃ何もできなかったし、さみしくて泣いていたかもしれません。人のやさしさは、人を強くするんだなと思いました。

ぼくもだれかを笑顔にしたり、がんばるためのパワーになれる、そんなやさしさをあげれる人になりたいです。そのためには困っている人をみかけたら、だれよりもはやく声をかけてあげようと心に決めました。

やさしい言葉

平井小学校　四年
土井泉里

みなさんはこまっている人を助けたことはありますか？　ぼくはこまっている人をたくさん助けたことがあります。なぜなら自分がこまっているときに助けられたことがあるからです。そのときの気持ちはうれしくて、ぼくもその相手にうれしかった気持ちを返したいなと思いました。こまっている人を助けてあげると自分の気持ちもうれしくなり、よかったなと気持ちも安心します。やさしい言葉をかけたり、手助けをすると相手も自分も笑顔になって、やさしい言葉っていいな、元気になるまほうの言葉だなと思いました。みんなが元気になったらうれしいし、

もっとやさしい言葉を使いたい気持ちになるなと思いました。

ぼくには、妹がいます。妹が泣いている時は「どうしたの？」と声をかけます。どうして声をかけているかというと、妹が泣いているとぼくも悲しい気持ちになります。妹の泣いている理由を聞いて、ぼくもいっしょに泣いてしまったことがありました。きずついている妹の心をなおしてあげたいなと思いました。そのために、自分がけいけんしたことのアドバイスをたくさん教えてあげました。妹が不安なことや、つらいこともものりこえて強く生きてほしいなと思いました。だからぼくは、やさしくて元気の出る言葉をたくさんかけてあげています。妹が元気になるとぼくもうれしくて気持ちが元気になります。妹からぼくもパワーをもらっているように思います。それが不思議で、いっしょに心が強くなったような気持ちになります。これからもつらいことや悲しいことがあってもいっしょにのりこえたいなと思います。なぜなら、ずっとなかよしな兄と妹でいたいし、妹の笑顔やよろこんでいるすがたが大好きだからです。

ぼくは、妹だけでなく学校のお友達やまわりの人たちの気持ちを考えて、いっしょに遊んだり、すごしたりしてみんなが笑顔でいられるようにしたいです。そのために、やさしい言葉や元気になる言葉をたくさん伝えてあげたいです。そのたびに自分もパワーをもらっているような気がして、いろいろなことを乗りこえられると思うからです。楽しいことだけでなく、つらいこともだれかといっしょだとどんなに高いかべでも乗りこえられると思います。兄妹っていいな、友達っていいな、家族っていいなと思います。ぼくにとって家族や学校のお友達はとても大切です。なぜならどんな時でも相談できるし、温かい言葉をくれるし、いつでも守ってくれるからです。みんながいてくれてうれしいしぼくもみんなにパワーをあげたいです。

人がこまっている時、悲しい時、つらい時、一人でなやまずにぼくに相談してほしいし、ぼくも助けてあげたいです。苦しい時は、一人じゃないと思ってほしいです。つらい時やこわい時は、ゆっくりしんこきゅうして前に進めるようにぼくもしていきたいなと思いました。ぼくはどんな時でもあきらめずに、パワーとやさしさをわけられるような人になりたいなと思います。

私の耳

平井小学校　四年
大川遊月（おおかわゆづき）

私は、小学二年生の時に耳が聞こえにくくなりました。なんちょうという病気です。私のなんちょうは、手じゅつができなくてこの先も治りません。

私は、耳が聞こえにくくなっていやなことがありました。例えば、小さな声で話されて聞こえなかったり、だいたい一、二メートルくらいはなれて話されても聞こえないです。耳が聞こえないと本当に大変です。友だちと話したいけど、何を言っているのか分かりませんでしたので、うなずいたり、「うん」と答えてました。授業では、聞こえなくてついていけない時もありました。

そして、病院でけんさをたくさんしました。お医者さんからほちょうきをつけるように言われました。その後ほちょうき屋さんに行きました。そこでもたくさんけんさをして、私にぴったりな耳につける機かいを作りました。

私は、ほちょうきをつけてから少し聞こえるようになりました。また、みんなと楽しくお話をしたり遊んだり出来るようになりました。

だけど、ほちょうきをつけたからといって完全に聞こえるわけではありません。まわりがガヤガヤザワザワしていたり、遠くの声や音は聞こえません。体調が悪い時やほちょうきの調子が悪い時は、近くの音も聞こえない時があります。

だから、みなさんにおねがいがあります。私やほちょうきをつけている人がいたら、近くで話して下さい。聞こえない時があるのでむしをしているわけではありません。近くに来てくれて大きな声ではっきりと話してくれたら聞こえます。みなさんの力が必要な病気です。お母さんが学校と話し合いをしてくれて、先生がみんなに伝えてくれて、私の今の学校生活はみなさんに助けてもらっていて楽しくすごせているし、勉強もついていけています。このようになんちょうの病気の人がいた時は助けてくれるとうれしいです。

この先、もしかしたらぜんぜん聞こえなくなってしまうかもしれないので手話を少し覚えました。手話とは、手を使って会話をすることです。耳が聞こえなくなることがこわいけど、手話で会話ができると知ったので少し安心しました。

このように先のことを考えるとこわいこともたくさんあるけど、学校やお友達や病院やほちょうき屋さんや家族、たくさんの周りの人たちに助けてもらっていてとてもかんしゃしています。楽しくすごせています。病気の人はたぶん助けてくれる人がいることがうれしいと思います。だから私の病気の人にだけではなく、周りに病気の人がいたら助けてあげて下さい。

最後に、私はかわいそうな子供ではありません。「病気だからかわいそうに。」と言われますが、大変だけど周りの人たちがやさしいので幸せです。お友達も大好きでやさしいし学校も助けてくれているし、家族もきょう力してくれています。だからかわいそうと思わずにたくさんせっして下さい。みんなの笑顔が私の幸せです。

二つのまほうの言葉

大同西小学校　四年
沼田（ぬまた）　愛（あい）

私が保育園生の時からお父さんやお母さんに言われていた言葉、それは、「ごめんなさい、ありがとうは必ず相手に言いなさい」でした。正直、言わなきゃいけない言葉ほど、言いづらいと思います。保育園生の時は、何も気にせず言えてました。四才の妹は、私がおこると小さな声で「ごめんね」と言ってきます。私は、しっかりあやまったというよりも、「ごめんね」と言う姿がかわいくて、え顔になってしまいます。私がえ顔になると、妹は、今までしょぼんとしていたのに、すっごくかわいいえ顔でギュッとだきついてきます。それがまたすごくかわいくて、私もまたえ顔になります。「ごめんなさい」は、あやまる時に言う言葉だけれど、人をえ顔にする言葉だと思います。

「ごめんなさい」とは反対に「ありがとう」も人をえ顔にする言葉だと思います。ありがとうは、感しゃする時に使う言葉です。でも、ふだんの生活でもよく耳にします。私は、家の手伝いをすることが好きです。たいへんだけど楽しいです。楽しいからやっているだけではなく、お母さんが「ありがとう」と言ってわらってくれるのがうれしいです。お姉ちゃんに、勉強を教えてもらった後に「ありがとう」と言うと、ふ

だんはあまりわらわないお姉ちゃんがニコッとわらってくれるのが、うれしい気持ちになります。お兄ちゃんは、ゲームがとくいなのでいっしょにやる時は、いつも負けちゃうけれど、「愛はゲーム弱いな」と言いながら勝てるようにアドバイスをしてくれます。その時に「ありがとう」と言うとわらってくれます。四才の妹は、私が何かしてあげると「ありがとう、ありがとう」と言ってくれます。本当にありがとうって思ってるのかなと感じる時もありますが、「ありがとう、ありがとう」と言ってることがかわいくてわらってしまいます。その反対に、私が妹に「ありがとう」と言うとなぜか毎回ドヤ顔をしてきます。そのドヤ顔も私はかわいくてわらってしまいます。

私は、「ごめんなさい」「ありがとう」の言葉は、人をえ顔にするまほうの言葉だと思います。保育園生のころから、お父さんやお母さんに言われていた言葉は、人をえ顔にする言葉なんだと気づきました。今回のテーマが「みんながえがおになるくらし」だったので、何がえ顔にするのかなと考えたけれど、特別な何かをする必要はないのかなと思います。「ごめんなさい」「ありがとう」が言えるくらし、それが、え顔になるくらしの第一歩だと思います。

ありがとうの気持ち

平井小学校　五年
池田健真（いけだけんしん）

ぼくは今年の四月から今の小学校に転校してきました。初めて会った先生たちや同じクラスになった友だち。始業式の日はすごくきんちょうしていたのを今もよく覚えています。

先生もクラスのみんなも、初めて会ったぼくに話しかけてくれてうれしくなったけど、その時のうれしかった気持ちを、「ありがとう。」とちゃんと言葉にして言えたかどうかは覚えていない。それが今も少し心に引っかかっている。

新しい小学校での生活がスタートしてすぐに友だちができた。同じゲームの話でもり上がって放課後いっしょに遊ぶことになり、うちでいっしょに遊んだ。まだ知り合って少ししかたってないのに遊びに来てくれてうれしかった。ぼくの妹と弟もよろこんでいたからよけいにうれしかった。

それから何日、何週間、すごすうちにいろいろな友だちもふえた。学校が終わって家に帰った時、「今日も楽しかったなぁ。」と思う自分に気づいた。それを家族に言うと「良かったね。」と言ってくれた。

ぼくが家に帰ってきて、今日も楽しかったと思うのは何でか、考えてみた。

・友だちにあえてうれしかったこと。
・友だちと昼休みいっしょに遊べたこと。
・きゅう食がおいしかったこと。
・友だちとゲームの話をしたこと。
・友だちと遊ぶやくそくしたこと。

頭の中に思いうかんだのは、友だちとのことばっかりだった。友だちがぼくの一日一日を楽しくしてくれていたんだ、と分かった。

そう思ったら、転校することに前向きな気持ちになれなかったけど今は転校してきてこんなに良い友だちに出会えたんだから、ありがたいなと思えた。

前の小学校では下の名前でよばれていたから、今の学校で名字でよば

れたりするのも新せんでいい。学校がちがうといろいろやり方がちがって分からないことも、友だちが教えてくれて、助けてくれたりする。ぼくがまた聞く前に気づいて言ってくれたりする人もいる。ここまで考えて、やっぱりぼくは「ありがとう。」の言葉をみんなにちゃんと言えていないと気づいた。

きっとみんなはぼくにやさしい気持ちで親切にしてくれているのに、お礼をできていなかったな。別に言わなきゃいけないルールがあるわけじゃないけれど、ぼくはみんなから助けてもらったり、やさしくしてもらったり、親切にしてもらったり、もらってばかりだ。

ぼくが友だちに何かを教えてあげたり、手伝ってあげたりしたとき、「ありがとう。」と言ってもらっていることも思い出した。先生の手伝いをしたとき、帰りに弟をむかえに行ったときも「ありがとう。」と言われたことも思い出した。うれしいと思ったときに、ありがとうの言葉にして返せたら、相手もうれしいだろうし、それを伝えられたぼくもきっとうれしいと思う。

これを毎日くり返していけたら、ぼくの毎日だけじゃなくてみんなの毎日も「今日も楽しかったな。」と思える日になるはず。二学期が始まったら、みんなのやさしい気持ちに、「ありがとう。」と言える自分になりたいです。

おじいちゃんの介護

鹿島小学校　六年
横田知希（よこた かずき）

ぼくには、八十才をすぎるおじいちゃんがいました。一人で元気に住んでいましたが、ある日急に体調が悪くなってたおれてしまい入院をすることになりました。しばらく入院して病院を退院する時には歩くことも大変そうな介護がひつようになってしまいました。それから家のげんかんのだんさをあがりやすくしたり、あちこちに手すりを付けたり、おじいちゃんがあぶなくないようにしました。いつも庭でいろいろしていたおじいちゃんなのでげんかんのだんさがなくなれば外にも行きやすくなれるとぼくもうれしく思いました。それからおじいちゃんは前みたいに歩けるように歩く練習をしたり、足を動かしたり、すごくがんばっていました。買い物もいっしょに行って手伝ったり、たまにたのまれた物を買いに行ったりして、おじいちゃんと会う日が多くなって、お話をしたり、元気になったおじいちゃんを見るとぼくはとてもうれしくなりました。ぼくは小学生なのでおじいちゃんを手伝ってあげることが少ないけどたのまれたことをするといつもおじいちゃんは「ありがとな。」と笑顔で言ってくれます。ぼくはその時とてもあたたかい気持ちになります。またお手伝いしようという気持ちになります。

大人のみんなを見ているとすごく大変で介護というのは時間も体力などいろいろ使うことなんだなとぼくは感じました。

それと、お手伝いしてもらう人とお手伝いをする人の気持ちも大事だと感じました。どちらかが聞いてくれなかったり、うまくいかなくてイ

ライラしてあたったりとかしてしまったら、どちらもつらい気持ちになるのだろうなと思いました。ぼくのおじいちゃんやみんなは大変でも相談しながらいろいろやっていて優しくお手伝いができてよかったなと思いました。それからぼくは外でお年よりを見ると少し気にするようになりました。

介護というのが気になってぼくは少し調べてみました。介護のお手伝いをする仕事や施設の紹介がありました。ぼくのおじいちゃんは家族のみんなが協力してお手伝いをしたけど、それが大変な時はこういった方法もあるんだなと知りました。お手伝いする人が少なければつかれてしまうから助けてもらうことも大事だなと調べていて思いました。

おじいちゃんの介護をすることで周りの人達の大変さや介護をされる人の気持ちを少しわかったような気がしました。とてもいい経験ができてよかったです。

みんながえがおになるくらし

高松小学校　六年
川上（かわかみ）　一心（いっしん）

ぼくは、お母さんと一緒に初めて「ＬＧＢＴＱプラス」について考えました。きっかけは、弟の言った言葉でした。

「このアヒルは、ピンクのリボンをしているから、女の子のアヒルだね。」

その後に、こう言い直しました。

「あ、ピンクのリボンだからって女の子のアヒルとは限らないよね。だって男の子でも、ピンクのリボンつけるもんね。」

この、何気ない会話から、色々と考え始めました。

まず、ぼくは、「ＬＧＢＴＱプラス」という言葉の意味を知りませんでした。お母さんに教えてもらい、「性的少数者」ということを知りました。どういうことかというと、女性が女性を好きだったり、男性が男性を好きだったりすることや、どちらの性別とも好きだったりすることです。そして、ぼくが、すごく、新鮮に感じたことは、「Ｑプラス」という方たちのことです。「Ｑプラス」とは、最近よく言われるようになった表現で、自分の性別について、「よくわからない」とか、「男性でも女性でもどちらでもない」とか、あえて「男性とも女性とも性別をつけたくない」という方たちです。自分で、性別をつけないと決めることは、ぼくにとっては、考えたことのない新しい世界でした。

世界中には、たくさんの人々がいます。みんながみんな、必ずしも、心と体の性が合っているとも限りません。このように性的少数者の方たちは、自分のすぐ近くにいると思います。

もし自分の大切な人が性的少数者とわかったらどうでしょうか。もし、ぼくのお父さんやお母さんや姉弟が、性的少数者だったらと考えてみました。その答えはすぐに見つかりました。それは、「それでいいと思う。」です。なぜなら、ぼくが男の体で、心も男であるということは、ただの多数者であって、少数者が認められないなんて、おかしいと思うからです。色々な人がいていいと思います。体と心の性がいっちする人、しない人。それは、全て、ぼくは「個性」だと思うからです。体は、目に見えているけれど、心は、だれにも見えません。自分の心が見えるのは、自分にだけです。それをひ定されるのは、つらいと思います。どんな人でも、みんな個性が認められていくと、全ての人が住みやすい、思いやりのある世界になると思います。まだまだ「ＬＧＢＴＱプ

ラス」についてのへんけんや差別があります。でも一人一人の気づかいや思いやりのれんさによって、みんなが住みやすい世界になっていくと思います。

優　秀（中学生の部）

みんなが笑顔になるには

鹿島中学校　一年
内野（うちの）　翔太（しょうた）

僕はみんなが笑顔になるには、お互いに助け合うことが大切だと思う。困っている人がいたら、助けたい。そういう気持ちは僕も持っている。しかし、人を助けるというのは簡単ではない。勇気も必要だし、まず、助けられるかどうか、自信もない。助けるためには何が大切なのかを考えてみることにしよう。

今まで自分が助けてもらった場面を振り返ってみる。幼稚園の頃、転んでけがをして泣いていた時に、先生に手当てをしてもらった。泣いている僕に優しく、「大丈夫だよ」と言ってなぐさめてくれたのを覚えている。けがをした人に手当てをするのはもちろん大事なことだが、声をかけることによって、安心した気持ちになって、痛みが和らぐような気がすると思う。

小学校の時には、体育で跳び箱のパフォーマンスをすることになり、練習を一生懸命頑張った。本番でもうまく技を決められたのだが、三回跳ばないといけないのを忘れてしまい、二回だけしか跳ばなかった。せっかく練習を頑張ったのにミスをしてしまい、悔しくて泣いてしまった。泣きながら、教室に戻ると、クラスのみんなが集まって、なぐさめてくれた。僕一人のためにみんなが心配してくれたことがうれしくて、悔しい気持ちがおさまっていった。

僕は助けられることが多くて、なかなか助ける側になることがないなと少し落ち込んでいたのだが、そんな時、テレビで東京の渋谷の街をきれいにするという番組を見た。

街中のいたる所に落書きやステッカーが貼ってあり、ごみも捨てられていた。お笑い芸人が数人でチームを組み、十二時間かけて、落書きを消し、ステッカーをはがし、ゴミを拾っていた。落書きは特殊な薬剤を使い、とても綺麗に消すことが出来たが、数が多くて消しても消しても無くならない。ステッカーは粘着物質が固まって、それが何重にも重なっているので、削り落とそうとしてもびくともせず、とても苦労をしていた。ごみも目を覆いたくなるほど、散乱していた。それでも十二時間かけて、だいぶ綺麗にすることが出来たのだが、一ヶ月後にはまた新たな落書きが増えていた。

遊び半分でやった行動がどんな迷惑をかけ、綺麗にするのにどのくらいの労力がかかるのか？やった人間は想像もしないのだろう。自分一人だけやったって、大したことはないと思っているのだろうか？お笑い芸人は作業をしている中で、情けなくなって、悔し涙を流していた。どうして？何が楽しくて、落書きをしたり、ステッカーを貼るのか？ごみをばらまくのか？と。

僕の身近な所では、家の近くの畑にたばこの吸いがらがたくさん捨てられていて、登校の度に目に入って、気になったので、休みの日に拾い

に行ったことがある。誰が捨てているのかは分からなかったが、おそらく、軽い気持ちで捨てているのではないかと思った。聞けるものなら、捨てる理由を問いただしたい。

この番組を通して、何か特別なことをすることだけが、笑顔を生むわけではないと感じた。落書きをしない。ステッカーを貼らない。ごみを捨てない。この「しない」っていうことも、みんなの笑顔を守ることにつながっていると、気がついた。

人を助けるうえで一番大切なのは、相手の気持ちになることだと思う。そして、みんなが笑顔になるには、迷惑なことをしないことも必要だ。僕のようになかなか人を助けられなくても、出来ることはたくさんある。そう思えて、少し自信がついた気がした。

耳が聞こえなくても

鹿野中学校　一年
御園（みその）　瑚白（こはく）

私は生まれつき片耳が全く聞こえません。聞こえないことが分かったのは五歳のときです。友達と耳をふさいで遊んでいたら右耳だけをふさいだときに全く聞こえないことに気づきました。でも、「そんなことないはず」と思ってそのままにしておきました。それから、左側からコショコショ話をされると全然聞こえなくて適当に「うん」などを言ってしまうことがありました。その頃からさすがに自覚してきました。でも、その時も「信じてくれるはずがない」で済ませてしまいました。今思えば、もっと早く言っておけばよかったと思います。小学二年生のある日、花火大会で母が左側から小さい声で話しかけてきたときに、「こっち側聞こえない」と思い切って言ってみました。母は心配して大きな病院に検査をしに連れていってくれました。検査の結果生まれつき左耳だけ全く聞こえないことが分かったのです。

聞こえないのは左耳だけだから日常ではあまり不便ではないけど、もし話しかけられて気づかなかったりしたら無視だと勘違いされてしまうので先生にお願いしてクラスや部活のみんなに毎年片耳が聞こえないことを伝えています。その時に向けられるみんなからの眼差しが不安でたまらなかったし、「この子は普通の子と違うんだ」と思われることが怖かったです。ですが、クラスのみんなは私が呼ばれていることに気づかなかったり、話しかけても気づかなかったりしても怒ったりせず、わざわざ近くに来て話しかけてくれたり、呼ばれていることを教えてくれたりしました。部活のときは、先生の声が聞こえやすいところまで連れて行ってくれたり、聞こえるか確認してくれたりします。そんなみんなの優しい心遣いがとてもありがたく嬉しく感じています。

しかし、私のように片耳だけが聞こえない人だけが世の中に存在するわけではありません。両耳が全く聞こえなかったり、聞こえづらかったり、聴力障がい者の聴力のレベルは人それぞれ聴こえ方も様々です。世の中の人々は聴力障がい者に対して私の友達のように寄り添ってくれているのか、これは私が最近思った疑問です。聴力障がい者に対して「普通ではない」と勝手に否定する人が多くいると思います。でも、耳が聞こえなくてもみんな同じ人間です。普通に生きないといけない理由なんてないし、明るい未来があることを信じて今を頑張って生きていると思います。

これから私は、聴力障がい者の人々が明るい未来を見られるために少しでも寄り添っていきたいと思います。二学期の総合の時間に支援学校

の皆さんとふれあえる機会があります。その中に聴力障がいの方がいるのかはわかりませんが、それまでに手話を勉強して耳が聞こえない人に「実は私、片耳が聞こえないんだ」と言いたいです。きっと、私がクラスや部活のみんなに片耳が聞こえないことを伝えた時のように、障がいがない人と過ごすことは怖いと思います。だから、声で伝えることはできないけれど、紙で伝えたり手話などで私から話しかけてみたいです。障がいがある人と、障がいがない人は境界線なんてないということが分かり合えれば仲良くなれると思います。これは聴覚障がいの方だけでなく視覚障がい身体障がいなど様々な障がいの方全員に言えると思います。普通じゃないといけない理由なんてない、人々は自分と向き合いながら生きていけばいいんだ。私はそう世の中の人々に伝えたいです。

後悔を超えて思うこと

高松中学校　二年
亘（わたる）　希乃華（ののか）

みなさんには、後悔していることがありますか。私には、数え切れないほどあります。なかでも、一番後悔しているのは、おじいちゃんのことです。

私には、おじいちゃんがいました。毎日会いにいくたびに遊んでくれる、優しいおじいちゃんでした。その時の私はまだ保育園生で、わがままを言っておじいちゃんを困らせてしまうことがたくさんありました。野菜の収穫を邪魔してしまったり、テレビの取り合いをしてしまったり、花瓶を割ってしまったり、家の中でシャボン玉や縄跳びをしてしまったり……。今思い返してみると、どうしてあんなにも迷惑をかけて困らせてしまったんだろうと後悔しています。その時はまだ、おじいちゃんが元気だったので、何をしても大丈夫、きっと許してくれると思ってしまっていたのかもしれません。

私が保育園を卒園して小学校に入学し、わからないことだらけの学校生活にようやく慣れてきた頃、親から突然、おじいちゃんが体調を崩してしまい、入院したことを知らされました。おじいちゃんはもう、いつもいた家にはおらず、入院生活を始めていました。おじいちゃんが入院した病院は、私の家から遠い所にあり、学校があった私は、面会する機会があまりなく、おじいちゃんと会える時間がとても少なくなってしまいました。

小学三年の時、学校から帰ってくると、父が慌ただしく家から出てきました。どうしたんだろうと思っていたら、

「早く出かける準備をして！」

と言われました。私には、何が起こっているか分かりませんでしたが、言われるがままに準備をして車に乗りこみました。すると父から、おじいちゃんが亡くなったと伝えられました。頭の中が真っ白になり、頭の整理が追いつかず、実感がわきませんでした。母はその時、私たちよりも先に行き、母の姉と病院に付き添っていたそうです。何時間もかけて病院に行き、駆け足でおじいちゃんの病室へ向かいました。病室の扉を開けると、横たわって目をつぶっているおじいちゃんと、普段の様子からは想像できない程、暗い顔をしている母と母の姉がいました。その光景を見た時に私は、

「おじいちゃんが死んでしまったのは、本当なんだ。」

と、どこか夢見心地だった気持ちが、現実に引き戻されたように感じました。

それからしばらく経ち、おじいちゃんのお葬式が開かれました。たくさんの人が集まって下さったのを見て、おじいちゃんは多くの人達から慕われていたんだと、当時の私でも気付くことができました。おじいちゃんが火葬された後、私は恐怖を覚えました。自分自身が死んでしまうことはもちろん、自分の近しい人達を、これから何度も見送っていかなければならないのかもしれない。そしてそれは、もう次の瞬間に起きても不思議ではないんだ――。そう考えると体の震えが止まらなかったことを、今でも覚えています。

これまでのことを思い返してみると、私はおじいちゃんに、全く祖父孝行できていなかったな、と思います。それどころか、迷惑をかけてばっかりで、たくさんたくさん困らせてしまっていたことをとても後悔しています。いくら悔やんでも、もうおじいちゃんに会うことはできません。人の命が尽きてしまった後の心残りは、いつまでも消えずに心に留まり続けるのだと、私は当時学ぶことができました。

もしかしたら、お母さん、お父さん、おばあちゃん、親戚や友達など、私の身近な人達が明日突然、自分の目の前からいなくなってしまうかもしれません。それは、皆さんにとっても可能性がない訳ではありません。大切な人が、まだ自分の近くにいてくれるうちに、親孝行や恩返しをして、後悔が残らないように生きていきたいです。

多様性が広がる社会へ

鹿島高等学校附属中学校　二年
安藤（あんどう）　亜佑人（あゆと）

私の通っていた小学校では、四年生のときから「障がい」について学習する時間があった。私はそれまで、障がいというものを深く考えたことはあまり無かった。なぜなら、身近にそのようなことを考えるきっかけになる出来事が無かったからだ。

初めは、調べ学習をしていた。どのような要因でなってしまったのか、障がいがある人に対する支援にはどのようなものがあるのかなど、様々なことを調べていた。しかし、私はその際はまだ障がいがある人を無縁の存在だと感じていた。活動の中で先生からは、障がいのある人との交流をもつということを知らされていた。私の住む地域には、特別支援学校がある。学校を訪問して交流会を行うということだった。私は少し動揺した。それまでは無縁と感じていた存在と距離が近くなることに対して、どうすればよいのかわからない不安の気持ちがあった。当時、私のクラスでは音楽発表会という行事が近く、その歌の練習をしていた。そのため、交流の際にその歌を披露することになった。しかし、不安の感情は絶えることはなかった。

交流会当日、私たちが自ら特別支援学校に足を運ぶ形で交流がスタートした。すると、少し年下の子たちが目を輝かせながらにっこりと笑顔でこちらを見ている様子が私たちの目に映った。それから、交流を進めていく中で二人一組でペアを組むことになった。私の相手は車椅子に乗っており、補助の先生がついていた。私はなるべく自分から接して、

いい思い出にしてもらえるようにしようと考え、積極的に話しかけようと努力した。その時には気づかなかったが、すでに不安の感情は消えていた。そして交流の終盤、練習していた「ありがとうの花」という曲を披露した。練習の時よりも何倍も思いがこもり、清々しい気分で終われた気がした。私はそれ以降、障がいのある人に対する意識が変わった。

「無縁の存在」ではないと感じることができたのだ。

この経験で得られたこと、それは「理解」することの必要性だと思う。私は確かに事前に調べ学習をしていた。しかし、実際に会う前には不安になってしまった。十四歳になった今振り返ると不安になる要素なんてほぼ無いと思える。しかし、そうなっていたというのは、事前に学習していた知識は実際に自分の知る必要のないことであり、本当に必要だったことは理解することだったと思う。私の中では、知ると理解するは全く違うことなのだと思う。知るは情報として自分に備えつけるものであり、実際の場面では役に立たないこともある。しかし、理解するのは知ったことを活用でき、物事や人に対して、自分を結びつけて考えることができるようになると思う。理解することが必要になるのは、決して障がいのある人だけに限った話ではない。昨今、ＳＮＳが普及したことによって無縁の存在と思い込んだ人を無慈悲に否定できてしまう社会が確立している。それによって命を絶ってしまう人も少なくないと感じる。しかし、そんな人たちを理解できれば、それは社会を良い方向へと導く原動力になるのではないだろうか。

多様性を主張できる社会の風潮が広まりつつある。しかし、私の住む地域ではまだそれが広がっていないように感じる。ぜひ、風潮を広げていきたい。それが実現できれば、容姿や年齢、人種などの今ある問題も新たな視点からの解決策が出せると思う。

人と人との壁を越える新たな時代の幕は、開かれ始めているのかもしれない。

挨拶の大切さ

鹿野中学校　三年
小林志帆

「いってらっしゃい」「いってきます」という会話を学校へ行くまでの間に何回しているのでしょうか。家族に言うだけではありません。玄関を出れば、仕事へ行く人やゴミ出しをしている近所の方と出会います。そうすると、どれだけ急いでいても疲れていても、「おはようございます」と言うことでさわやかな気持ちになれるのです。ですが、家族でもない私になぜ「いってらっしゃい」と言ってくれるのでしょうか。私の家の近所の方々はいい人ばかりです。私が小さかった頃に遊んでくれたり、中学生になった今でも見かけると声をかけてくれます。近所の方との会話は朝だけではありません。学校からの帰り道には「おかえり」と声をかけてくれるのです。私の両親は共働きで、私が家に帰っても家には誰もいません。「ただいま」と言っても、「おかえりなさい」と返事は返ってきません。ある日ふと私は考えました。挨拶は人と人をつなぐ大切な役割があるのではないかということです。

最近ではマンションが増え、マンションでは近所付き合いがないということをよく耳にします。そして、高齢化社会のなかでお年寄りの孤独死が多いということもよく耳にします。このような現状を知り、私は挨拶をすることがとても大切だと感じました。そこで、私は高齢者の孤独死について調べてみることにしました。六十五歳以上を対象にした調査

によると、一人暮らしで近所付き合いが少なく社会的に孤立した高齢者は介護が必要になったり、死亡するリスクが高くなるという結果になったそうです。それから、地域での付き合いの増加は閉じこもりを回避し、出かけるための理由となるそうです。私は、このようなことを知り、自分にできることはないかと考えました。そこで、基本となるものが挨拶なのではないかと思いました。挨拶は簡単なコミュニケーションだと思います。私は小さい頃、人見知りが激しく、近所の人に挨拶することも苦手でした。しかし、祖母や両親が近所の人と話したり、挨拶をする中で私にも声をかけてくれました。そして、今では私の学校での活動を応援してくれるのです。その他にも近所付き合いが減った理由を調べてみると普段顔を合わせることがないからといった理由や話すきっかけがないからという理由が多くありました。確かにマンションは多くの人が住んでいて顔を合わせることも話すきっかけもないかも知れません。マンションに住む人のなかには近所の人とあまり関わらずに生活したいと考える人も多いことがわかりました。しかし、災害や高齢化社会の影響である程度の関わりをもつことも大切だと考える人が増えているそうです。関わりをもつための一歩が子供から大人まで誰でもできる挨拶なのではないでしょうか。

孤独死を直接、減らそうとすることは今の私には難しいかもしれません。しかし、私は自分に何ができるか考えました。孤独死を減らすための一歩として挨拶なら自分にもできることだと思います。私は今まで高齢者の孤独死の問題を自分には関係のない遠い世界の問題のように捉えていました。しかし、高齢化は進み、高齢者の人数は増えています。挨拶という自分に身近なことと結びつけて考えただけで自分と離れた問題ではないのだと気づくことができました。普段何気なくしている挨拶ですが、挨拶で誰かのためになるのではないかと思うと嫌々していた挨拶も自然と明るくなるはずです。挨拶は明るい挨拶をすることで、自分にとっても相手にとっても良い気持ちになれるすごい力をもっていると思います。まずは、私が挨拶を心がけ、多くの人に挨拶の力に気づいてほしいです。

高齢者に対しての接し方

大野中学校　三年
近野（こんの）　なより

私のおばあちゃんはとても元気です。一緒には住んでいないけど、家が近く、小さい頃からずっと遊んでもらっていました。送りむかえをたくさんしてもらっていたり、困っている時にはいつも助けてくれています。動くこともしゃべることも大好きなので、おばあちゃんには見えないなといつも感じています。けれど、私は学校で、高齢者疑似体験をして私のおばあちゃんも本当はこんなにも大変な思いをしていたのかなと不安に思いました。

高齢者疑似体験とは高齢者の日常生活動作を疑似的に体験し、加齢による身体的な変化を知ることができるという体験です。まず、加齢から生じる白内障によって起こる色覚変化を特殊メガネを付けて、体験しました。すると、周りが全体的に黄色に見えて色がはっきりせず、何が何色かが分からない状態にとてもおどろきました。白内障というのはこんなにも怖いものなんだと知ることができました。そして、肘とひざにサポーターを付け、関節を固定して、重りをつけました。その重りは想像以上に重く、少し歩くのでさえすぐにつかれてしまいます。さらに、関

節が固定されているので階段を下りることが難しく、いつ転んでもおかしくない状態で下りることだけでものすごく時間がかかりました。私のおばあちゃんの家には、階段があって、おばあちゃんの上り下りをしている姿を何回も見てきていて、いつも若い人のように素早く歩いているので、知らなかったけど、体験して歩くのもこんなに大変な人もいるんだなと分かりました。また、テープで指を固定したり手袋をつけたりして、細かい作業のしにくさや、物の掴みにくさを体験しました。この手で、字をかくと思うように上手くかけず、折り紙をおってみると一回おることも時間がかかってしまって、自分の思うように指が動かないことにおどろきました。何をするにも時間がかかって大変そうだなと感じました。今でも私のおばあちゃんは、トランプのスピードができます。スピードは、数字がつながるように素早くカードを出していくゲームです。頭も使いながらカードを早く出し終わった人が勝ちなのでとてもいそがしく、物がつかみにくい状態なら絶対に遅くなってしまうはずなのに、私はおばあちゃんに勝ったり、負けたりして、いい勝負をしています。そんなこともあり、こんなにも指が動かしづらいなんて思ってもいませんでした。この体験では、おどろくことばかりでした。けれど、耳せんを付けて、音の聞きづらさも体験しました。すると、内容が聞きとりづらく、しっかり聞く意識をもつようにしたり、近くにいくと聞こえやすくなりました。この耳の聞こえづらさも大変だなと感じました。私のおばあちゃんも遠くから話しかけると聞こえなかったようで反応がないということもあるので、高齢者は耳が聞こえづらくなってしまうことはよくあるのかなと思いました。

この体験をして、高齢者の人はこんなにも日常生活で大変な思いをしているんだと知ることができ、私のおばあちゃんと比べて、どれだけ不自由なのかは、高齢者の人によって差があることも知れました。なので、私のおばあちゃんは元気だけど、私ができることは積極的に手伝ってサポートしていきたいと思いました。高齢者の人の接し方をもっと考えようと思うきっかけになりました。

優　秀（高等学校生の部）

ボランティアから得られるもの

鹿島高等学校　一年
兼平（かねひら）　真依（まい）

私の母はボランティアによく参加している。「なぜボランティアをしているのだろう」小さい頃の私には分からなかった。人を助けることが好きなのか、はたまた、人助けをしている自分が好きなのか、いずれにせよ無償で人の為に行動するということが小さい頃の私にはあまり理解ができなかった。

母は、私が小学校低学年の頃、「しいの木くらぶ」という主に小学校の子どもたちに読み聞かせをするグループに属していた。頻繁に図書館に行って、絵本を何冊か借りてきて、読んでは「どれがいいかな」と悩み、選び終わったと思ったら何回も音読をし、耳にタコができそうだと思ったところで「読み聞かせするから聴いて」とよく練習相手になったものだ。他の学年の時には何とも思わないのに、自分の学年やクラスに来た時は、なぜか自分がドキドキして、クラスメイトや友達が、「あの

人お母さん？」と聞いてくるのを恥ずかしげに小さく頷いたのを覚えている。母がほめられるたびに何故か自分が誇らしくなって、そこから母の活動に積極的に協力するようになった。

そして、母が所属していた団体を辞め、私が高学年になった時、私は初めてボランティアに参加した。内容は早朝のごみ拾いだ。朝五時に母に起こされ、寝ぼけ眼を擦りながら支度をし、着いたらトングでごみを拾い始める。初めはボランティアが終わった後の外食につられてしぶしぶ参加していたが、他の参加者から「朝から偉いね。」と言われて、自分の手でその場所がきれいになった実感が湧いた時、達成感と共にやりがいを感じるようになった。ごみ拾いを続けていると、通学路にごみがあると無性に気になり、そのうち、休日を使って自主的にごみ拾いをするようになっていった。

そして現在の母は、子ども食堂の手伝いをしている。子ども食堂とは、親が忙しく、ご飯を一人で食べていたり、毎日お弁当を買って食べていたりする子などが、一人でも入れる食堂のことだ。そこの手伝いとして、月ごとの季節のモチーフにあった折り紙を折ったり、おもちゃを作ったりしている。私は高校生になって忙しくなり、ボランティアをする時間がなくなってしまったが、母が「こんなのどう」と見せてくれるおもちゃを本当に子どもが楽しめるか考えたり、ダメだったらインターネットで調べて他の案を出してみたり、微力ではあるが手伝いを行っている。ある日、母が実際の子どもたちの様子を撮った写真を見せてくれた。どの子も笑顔だった。私は心が温かくなるのを感じ、胸がいっぱいになった。今まで行っていたごみ拾いでは、自分がしたことで誰かが喜んでいる姿は見たことがなかった。私はこの時やっと理解した。母が何故ボランティアをしているのか。母は人の喜んでいる姿が好きなのだと思う。人を喜ばせたい一心でボランティアをしている。ごみ拾いでも見えないだけで喜んでいる相手がいる、そう考えると母が無償でも一つ一つのボランティアに一所懸命になっていたのも頷ける。そして、私も人を喜ばせることが好きなことに気付いた。

無償で誰かのために動くボランティア、その結果得られるものはたくさんある。母の読み聞かせを聴いてほめてくれたクラスメイト、ごみ拾いをして得た達成感、手伝いをして作ったおもちゃで笑顔になってくれた子どもたち、今までの経験からボランティアから得られるありがたみを学んだ。「自分がしたことは、巡り巡って返ってくる」という言葉があるように、良いことをしたら良いことが返ってくる。このことを信じて家族、友達、誰でもよい、まずは一歩行動してみてほしい。

障がいは不便であっても不幸ではない

鹿島学園高等学校　一年
久保（くぼ）　玲菜（れいな）

私は「五体不満足」という先天性四肢切断という障がいをもった主人公自身が書いた本を読んだことがあります。また、夏休みに日本テレビから放送された「24時間テレビ」では、様々な障がいがあり、それぞれの人生があることを知るきっかけとなりました。はじめは、可哀そうとか、やりたいことができないのではないかとか、幸せではないのではないか、自分や家族が障がいをもつことになったらどうしよう、などということばかりが頭の中を占領していました。しかし、そのような本やメディアを観ているうちに、五体満足である人と、五体不満足である人では、生き方に違いがないのではないかと思うようになりました。なぜな

らば、人は誰しも一人で生きていくことはできず、周りの人のサポートを受けているからです。しかし、そのことが上手くいくためには、どのようなサポートが必要なのかを理解してもらうことや、周囲の人たちがどのようなサポートをすればよいのか知ろうとすることが大事だと思います。今多様性という言葉をよく耳にします。人種や国籍、性別、年齢、障がいの有無、宗教、性的指向、価値観など異なる特徴・特性をもつ人がともに存在しています。相手の気持ちや考えを全て理解することは難しいけれど、相手の気持ちや考えを否定するのではなく、また理解することをやめるのではなく、自分とは違う考えや気持ちがあるということを知ること、また理解しようとする気持ちをお互いにもち尊重し合えることで、それぞれが生きやすい社会になるのではないかと思います。

そして、自分の視野が狭く、偏った考え方であったことに気づかされました。障がいにより不自由さを抱えている人も、人生を精一杯楽しみ、誰かの役に立ちたいと願い、感謝の気持ちをもち一日一日を大切に生きている姿があることを知ったからです。むしろ、そのような積極的な生き方に、感動と勇気をもらい、自分は果たしてどうなのか、と自問自答し、相手の立場や状況をよく知らずに、こういった人はこうなのではないかと、主観的に考えてしまっていた自分を振り返りました。

これらのことから、今私にできることは何だろうと考えました。様々な人の気持ちや考えを理解するためには、自分自身が様々な経験をしていることが必要だと思います。なので、挑戦する前にできないかもしれないと諦めるのではなく、沢山のことに挑戦していくことが今私にできることではないかと思います。現在私は、高校生となり寮生活を送っています。ルームメイトは海外からの留学生二人です。また、初めての海外研修への参加をし、異なる人種や国籍、文化の理解や相互尊重の重要性を実感しています。また、今まで経験のないチアダンス部に入部し、ダンスはやはり難しいと実感し、挑戦する大変さや、チームとして一つになるために息を合わせることの大切さなどを学んでいます。これらの新しい経験全てが、沢山の人のサポートがあってのことだと実感し、感謝の気持ちをもって取り組むことができています。今後も、経験のないボランティア活動に参加したり、生徒会に立候補をするなどの新たな挑戦のなかから、沢山のことを考え、努力し、学び、感じ、自己を振り返ることや、様々な人の気持ちや考えの理解に近づけるような経験を増やし成長していきたいと思います。

本やメディアからは、考えることや、学ぶきっかけを得ることができます。また、実際に経験したことからは、視野の広がりや、より深い学びを得ることができます。今回も、障がいについて考えることができ、そこから自分を振り返り、今行っていることの意味づけや、今後の目標をもつことができました。学ぶことができることへの感謝の気持ちを忘れず、積極的に様々な経験や挑戦をしていきたいと思います。

音楽の架け橋

鹿島高等学校　二年
中島倖加（なかじまさちか）

音楽には、大きな力があると私は信じています。小さい頃からずっと、私は音楽に触れてきました。曲を聞いたり、歌を歌ったり、踊ったり、演奏したり、とりわけ、吹奏楽部でクラリネットを五年間毎日演奏している私のそばにはいつも音楽があって、高校生となった現在まで、音楽を嫌いになったことは一度もありません。最近では、新型コロナウイル

スによる規制が少しずつ緩和されてきたことで、鹿嶋市のイベントで演奏できる機会も増えてきました。一生懸命演奏している仲間の顔や、聴いてくれているお客さんの笑顔を見るたび、さらに音楽を好きになりました。そんな私が「音楽療法」を知ったのは、つい最近のことでした。

そのきっかけは、私の祖母の物忘れが進んでしまったことでした。忘れてしまうことに不安を抱き、元気のなくなった祖母を心配した私の母が、母の知り合いで音楽療法士として活動している方のイベントに、祖母と私を連れ立って参加したことでした。イベントは「介護予防」がテーマで、ピアノの音に合わせて参加者は歌を歌ったり、それに合わせて体を動かしたりしていました。祖母は始まる前は、「今日は何をするの。」と不安そうな顔をしていました。もしかしたら嫌がってしまうのではないかと思っていたのですが、始まると祖母は自分から大きな声で歌を歌い、楽しそうに体を動かしていました。私は、イベントに参加するまで音楽療法についての知識がなく、本当に介護を予防できるのか半信半疑でした。しかし、忘れてしまうことを不安に感じ、笑うことが減っていた祖母の顔に久しぶりに笑顔が浮かんだことで、音楽療法の本当の意義がわかりました。

その後、私は音楽療法について詳しく調べました。イベントをきっかけに、音楽のもつ大きな力を知り、「音楽で人の笑顔をつくれる」ということに非常に魅力を感じました。そして、私の好きな音楽で、人を幸せにできないかと考え始めました。私たちの身の回りには、障がいをもっている人が暮らしています。身体の障がい、知的障がい、精神障がいなど障がいの種類はさまざまです。障がいによってできないことがあると不幸だと思われがちですが、決してそうではありません。耳が聞こえなくても作曲ができたり、発達障がいがあっても人一倍ダンスが上手に踊れたりと、どんな人でもどんな方法でも、音楽を楽しむことはできます。楽しむのは音楽だけではありません。障がいの有無や年齢、性や国籍、そんなものは関係なく、人は誰でも笑顔で過ごす権利があるのです。

社会にはさまざまな問題があります。差別や偏見については昔から対策が取られていて改善されつつありますが、完全になくなった訳ではありません。高齢者や子どもなど、弱者への虐待なども私達の見えないところで起こっています。私は、音楽の力でそのような社会問題が少しでも解消できたらいいなと思います。音楽療育士になって、障がいをもつ子どもや「自分は幸せかな」と笑顔を失ってしまった子どもの笑顔を見ること。これは私の一つの夢です。

人と人との間に、音楽の架け橋を。壁を作らず、誰もが笑って幸せを感じる世の中を作る。そうすれば、今よりももっと人々が笑顔で暮らせる良い社会になるのではないかと考えています。

介護について

鹿島学園高等学校　二年
大塚（おおつか）　恵怜奈（えれな）

私は七十歳以上のおじいちゃんとおばあちゃんと一緒に住んでいます。おじいちゃんは今介護が必要な状態であり、主に私の母が仕事や家事と並行して介護をしています。だから、とても疲れた声で「もう本当に大変」と言っているのをよく聞きます。その時、初めて介護の大変さが分かりました。そして、これから私が介護する立場になったときのためにも、もっと詳しく介護について知らなければいけないと思いました。

そもそも介護とはどのような意味なのでしょうか。似たような言葉に

看護という言葉がありますが何が違うのでしょうか。まず、介護とは日常生活を安全かつ快適に送るためのサポートをすることで、看護とは病気や怪我などの治療や療養のサポートをすることであると分かりました。この二つの言葉を比べてみたとき、看護は特別な知識がなければできないですが、介護は日々の生活の延長上にあるものだと思いました。家族として同じ空間で生活すれば必ずお互いに助け合いをしています。例えば、私がお風呂掃除や皿洗いをしたら、母の日常生活の負担を減らすことにつながります。つまり、母の日常生活を快適に送るためのサポートをした、言い換えれば介護をしたということです。だから、私がするべきことは母の行動をよく観察し、自分から進んで手伝うことです。日常生活の手伝いがいざ介護が必要になった時のための練習になると思いました。

介護を必要とする人が身内であれば、その人について知っていることも多いので介護は比較的たやすいですが、私の母のように仕事や家事を並行してとなるととても大変になってきます。そこで、介護のプロである介護士に任せようと思っても、適切な介護サービスを受けられないことがあります。このことを介護難民といい、介護問題の一つです。介護難民が増える理由として、高齢者が増加したことにより要介護者の数も増えたことと介護に携わる従業員不足が挙げられます。この問題の解決策として、介護に携わる人の賃金を上げること、そして、家族ができる介護の質を上げることだと考えます。ここ数年、介護に携わる人の賃金が減っているという記事を見ました。介護士になりたいと思っても経済的な理由であきらめる人も少なくないです。また、家族内で適切な介護が少しでもできれば介護士の負担が減り、介護難民の数を減らせると思いました。具体的には、中学生や高校生からの介護に関するセミナーを開催し、若いうちから正しい知識と介護に対しての意識をもつことができます。介護難民は、誰にでも起こりうる深刻な問題であり、いろいろな対策を考えることが大切なのだと思いました。

先日、24時間テレビを見ていた時、介護を受けている二十代女性についてのコーナーがありました。その女性は次第に体が動かせなくなる難病を抱えていて、母や父といった家族もいなく、小さい頃から孤児院で育ったといいます。日常生活は常に介護士さんに支えてもらいながらの生活を送っています。そこで私が驚いたのは二人の関係です。女性は介護士さんのことを家族のようだと笑顔で語っていました。その時私は、言葉以上に血のつながりを超えた特別な関係があり、介護は肉体的な支えだけではなく精神的な支えもすることに気づきました。改めて介護士のすごさが分かりました。そして、プロとの違いもそこにあるのではないかと思いました。私も将来、介護士のような人の人生を支えられるかっこいい職に就きたいです。

【佳作入選作品】（小学生の部）

じいちゃんが、おしえてくれたこと	鉢形小学校	一年	関野琉生
みんながえがおになるくらし	鉢形小学校	一年	野口暢聖
みんながえがおになるくらし	大同西小学校	一年	沢畠望笑
やさしくするってどんなこと	中野西小学校	一年	大川るな
高れい社会に思うこと	波野小学校	二年	高橋時羽
みんながえがおになるくらし	波野小学校	二年	荏原知里
みんながえがおになるくらし	高松小学校	二年	川上大志
ぼくのひいおじいちゃんと ひいおばあちゃん	平井小学校	二年	橋本翼
みんながえがおになるくらし	鉢形小学校	二年	岩井華怜
おうえんの力	豊郷小学校	三年	吉田悠真
みらいの車いす	三笠小学校	三年	鈴木彩世
みんながえがおになるくらし	中野東小学校	三年	髙田海航
ぼくのおばちゃん	中野西小学校	三年	倉川湊
やさしいって何だろう？	波野小学校	四年	内野琴葉
ブラインドサッカーと出会って	鉢形小学校	四年	大貫哲汰
あいさつの大切さ	中野東小学校	四年	鎌形はるの
虹	波野小学校	五年	池田杏奈
ぼくがおすよ	高松小学校	五年	河津元晴
思いやりに気づいた夏	平井小学校	五年	井上明南
私のクラス	大同東小学校	五年	安重結空
大切な仲間たち	大同西小学校	五年	寺西恵怜菜
えがおになる	中野西小学校	五年	関谷恵斗
差別っていけないの	豊津小学校	六年	坂本紗良
にぃにぃが教えてくれたこと	三笠小学校	六年	笹沼華梨
思いやりのある暮らし	鉢形小学校	六年	大竹澪羽
福祉と共に	大同東小学校	六年	川井結稀
支援の輪	中野東小学校	六年	永山瑠愛

【佳作入選作品】（中学生の部）

当たり前をあたりまえに	鹿島中学校	一年	松澤	大和
「こんにちは」から明るい社会へ	鹿島中学校	一年	平岡	泰祐
ヘアドネーションで学んだこと	鹿野中学校	一年	二宮	佳穂
みんなが　えがおになる　くらし	大野中学校	一年	久保	茜
話してくれてありがとう	鹿島高等学校附属中学校	一年	宮崎	陽南子
空港で見つけたバリアフリー	高松中学校	二年	池田	梨恋
幸せのためにできること	鹿野中学校	二年	遠藤	怜
大好きなおばあちゃんのために	鹿野中学校	二年	本田	小夏
みんながえがおになるくらし	大野中学校	二年	瀬尾	拓夢
介護について	大野中学校	二年	久保木	結
障がい者との接し方	鹿野中学校	三年	岡野	瑠美
立場による考え方の違い	平井中学校	三年	栗田	ひより
韓国短期留学での学び	鹿島高等学校附属中学校	三年	相馬	樹音

【佳作入選作品】（高等学校生の部）

発達障害と向き合う	鹿島高等学校	一年	石神	花怜
笑顔あふれる世の中へ	鹿島学園高等学校	一年	山口	紗奈
優しさで溢れる暮らし	鹿島学園高等学校	一年	関	夏音
みんなのためにできること	鹿島学園高等学校	一年	齊藤	心菜
ジェンダーレスの実現へ	鹿島高等学校	二年	石川	夢華
話を聞くこと	鹿島高等学校	二年	宮城	来羽
私の使命	鹿島高等学校	二年	岩本	彩花
障がいについて	鹿島学園高等学校	二年	香取	美佳
ＬＧＢＴについて私が考えること	鹿島学園高等学校	二年	広島	春花

児童生徒福祉作文応募数

●小学校

学 年	応募数
1 年	82
2 年	62
3 年	117
4 年	96
5 年	105
6 年	113
合 計	575

●中学校

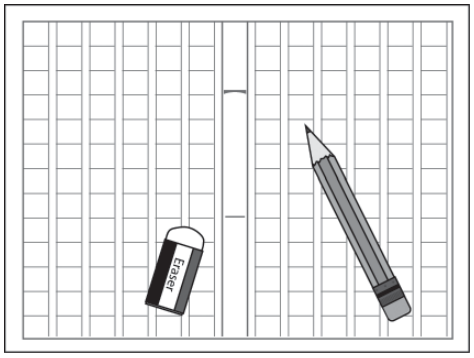
学 年	応募数
1 年	234
2 年	46
3 年	34
合 計	314

●高等学校

学 年	応募数
1 年	134
2 年	151
3 年	0
合 計	285

●応募総数

小　学　校	575編
中　学　校	314編
高 等 学 校	285編
合　　計	1,174編



あとがき

新型コロナウイルス感染症が、昨年五月から「五類感染症」に移行され、学校や地域、家庭生活にも活力が出てきていることが感じられます。

「みんなが　えがおになる　くらし」という新しいテーマに代わり二年目を迎えました。過去のテーマを振り返ると、昭和五十六年から平成十年までは、年度ごとにテーマが変わり、「友だち」、「お父さん」のように身近で具体的なものでした。平成十一年から平成二十一年までは、福祉とのかかわりがテーマになり、幅が広がった感があります。そして令和三年までの十二年間は「たすけあい　ささえあい　ふれあい」となりテーマの幅が更に広がっています。この傾向は、福祉作文が学校・地域・家庭に浸透してその趣旨が理解され作文という形で具現化された結果と考えます。

今年度の応募総数はほぼ平年並みで、小学校は五七五編、中学校三一四編で一年生が七割を占め、高校は二八五編で一、二年生の応募のみとなっていますが、進路などの諸事情によるものと思われます。各学校では、いろいろな団体から依頼される作文や絵画等に応じる中で、これだけの応募が毎年あることに深く感謝しております。

審査にあたっては、審査委員九名がそれぞれ時間をかけて作品と向き合いました。日頃の体験などを通しての考えや行動の変化、身近な出来事や社会の出来事についての考察と自己の生き方、他者との関わり方などに着目しつつ、作者の様子を想い浮かべながら読ませていただきました。審査委員の方々からは、感動と同時に心が温まる良い機会が得られたことへの感謝が述べられました。

表現の仕方で気付いたことですが、段落が長めの作文や、会話文が多用され、実際の文字数が少なめな作文なども見られましたので、今後気をつけていきたいものです。全般的には、各学校の第一次審査を通過した作品だけに、どの作文も実際の経験や体験に基づいて、その時の気持ちや考えが率直に表現されておりましたので、甲乙つけ難く、難しい審査となりました。また、美しく丁寧な文字で書かれた作品が多く見られるようになり、審査委員一同驚き、そして感動しました。

最後になりますが、小・中・高校生のみなさんが感じ取った福祉の心が、令和の社会生活の中で大いに発揮され生かされ、テーマ「みんなが　えがおになる　くらし」に繋がることを切に願っております。児童生徒福祉作文へのご応募本当にありがとうございました。

審査委員長　**本田敏尋**

児童生徒福祉作文審査委員

本田敏尋	元中学校校長
糸川康子	民生委員児童委員（主任児童委員）
吉田いさ子	個人ボランティア
日向寺恵美	鹿嶋市食育クラブわかば会長
内芝秀美	鹿嶋市青少年育成市民会議会長
中津智宏	福祉体験講話講師
伊藤みつゑ	鹿嶋市読書団体連合会
大黒道也	波野小学校教諭
石塚雅美	平井小学校教諭

（順不同・敬称略）

第43集

児童生徒福祉作文集

令和５年度（2024年２月）

編集・発行　社会福祉法人 鹿嶋市社会福祉協議会

後　援　鹿嶋市教育委員会

〒314-0012　鹿嶋市平井１３５０－４５（鹿嶋市総合福祉センター内）
ＴＥＬ　0299－82－2621・FAX　0299－83－0242
ホームページ　http://www.kashima-shakyo.jp
Ｅメール　k-shakyo@sopia.or.jp

この事業は皆様から寄せられた赤い羽根共同募金の分配金によって運営されています。